



第9回記者研修会

人間のまなざしをもったニュース報道

玉木 明 フリーランス

2006年8月25日

page 2

言葉と報道の不可避的なギャップ
憑依のメカニズム：無署名記事の落とし穴

page 3

言葉は意図しないものまで発信する

page 4

三人称客観報道の限界

page 5

断罪型から問題提起型へ

page 6

「いま・ここ・わたし」が言葉の原点

page7

<一人称 = わたし> を鍛える

page8

現場を踏んで書いてこそ

pages9-12

(質疑応答)

署名記事：自分の心を通した言葉
心に通っていない報道には違和感
一人称を取り戻すのに3年かかった

玉木です。レジュメ、資料等をお読みいただければ、これから私がお話したいことは大体見当はつくかと思うのですが、皆さんにいつおきたいことというのは、そんなにむずかしいことではありません。私も現場をずっと歩いてきましたが、何でこうなるんだろうといつも疑問に思ってきたことがありました。それがようやく何となくわかりかけてきた、というような感じを持っているわけです。もう少し早くわかっていたら、ジャーナリスト、記者としてもう少しまともな仕事ができただろうけれども、この歳になるまで何となくわからなかったというのが正直なところです。ちょっと遅過ぎたかなという感じがありますが、皆さんは大分お若いので、いまから自覚的に取り組めば、もう少しましな仕事ができるのではないかと思います。どのへんに気をつければいいのかというあたりの話をご参考までしたいと思うのです。

言葉と報道の不可避的なギャップ

一つは、ジャーナリズムというものを現代思想の観点で見比べてみたときに、なるほどなという感じになりました。ピンとくるものがあつたのです。言語論を大学で学んでこられた方ならピンとくると思うんですけども、現代言語論と、いわゆる新聞、ジャーナリズムが根っこに置いている言語論というのは、全く逆になっている。このあたりがやはり一番大きな問題だろうという気がします。

客観報道という考え方は、戦後GHQからプレス綱領として提示された近代ジャーナリズムの理念です。これに依拠してやれば、日本の新聞、ジャーナリズムも再生できるんだというふうに思って、戦後50年、60年やってきたわけです。しかしながら、その客観報道という考え方の根っこにある哲学、言語論というのは、要するに近代合理主義の言語論、近代合理主義の哲学なわけです。

具体的にいいますと、出来事は正しく客観的に認識できるんだ、言葉は、それを正しくありのまま人に伝えることが可能なんだ、という確信を支えているのが近代合理主義の哲学・言語論だということです。

もちろん実際の言語がそういう構造を持

っておれば、全く問題はないわけけれども、言語、言葉というのはそう単純なものではない。「ニュース鏡像説」という考え方がありません。これは、言葉が鏡のように出来事をそのまま映しとることができるという考え方です。ところが、実際の言葉は、そうっていない。皆さんも毎日記事を書いたりして実感されていると思いますけれども、そう単純にできていないですね。

ある言語学者によれば、言葉ほどいいかげんなものはない、悲しむべき欠陥を持っているということになります。ところが、ジャーナリズムというのは、できるだけ正確に事実を伝えよう、正しく、客観的に伝えようとする。それがジャーナリズムの目的だということです。すると、事実を正確に伝えるというジャーナリズムの目的と限りなくあいまいな言語という手段との間に大きなギャップが出るわけなんです。

そういうあいまいな言葉を使って報道しているということを常に心がけておかないとえらい目にあってしまうというのが実際のジャーナリズム、報道の現場だろうと思います。

それで、あまり抽象的な話ばかりしておってもいかがかと思しますので、新聞の事例、報道の事例をもとに具体的にお話ししていきたいと思います。

客観報道とは、つまり無署名の記事ですね。事実を報道するんだから、記者の名前なんて関係ないだろう、事実の一つしかないんだから、だれが報道したかは問題ではないという考え方です。しかしながら、言葉というのはそういうふうになっていないので、いかなる場合でも無署名、すなわち一人称の排除された文体で記事を書かざるを得ないということになってくると、いろんな弊害というものが起こってきます。

憑依のメカニズム：無署名記事の落とし穴

最初の事例、これは毎日新聞の夕刊に掲載されたものです。千葉県・四街道市の市民マラソン大会、地域のスポーツ大会だろうと思いますが、そこで車いすマラソンのコースが10kmから5kmに短縮されたということがあったのです。この記事は、四街道市の担当者

から千葉支局へ猛烈な抗議を受けた記事として「開かれた新聞」委員会の方へ上がってきたものです。

なぜこれがそんなに抗議を受けたのかというあたりをちょっと考えていただきたいと思うのです。私なんか、こういう記事をしょっちゅう書いたなという記憶があります。

ここには障害者スポーツを推進していくことは善という暗黙の前提があります。その前提に反するもの、すなわち障害者スポーツに障害になるような無理解な姿勢というのは批判されてしかるべきだという発想だろうと思います。果たして10kmのコースを5kmに短縮したことが障害者スポーツに対する無理解からきているのかどうなのか、という点がこの記事のポイントだと思うのです。

案の定、市の担当者の言い分は、10kmだと、例年参加者が少なく、4人か5人しかこない。これではまずいので、もう少し広く一般に参加してほしい、というので、5kmならどうだろうか、それならもっと参加しやすいだろうという発想から5kmにしたということなのです。

ところが、この記事には、「障害者スポーツへの関心が高まっている中だけに、関係者の間からは、疑問の声が上がっている」というふうに書かれています。つまり、10kmから5kmに短縮するというのは、せっかく盛り上がっている障害者スポーツに対する関心を阻害することになるんじゃないか、そういう批判の記事なのです。

無署名記事、つまり三人称の記事で書こうとすると、どうしてもこのような、だれからみても文句いわれない観点に立って記事を書こうとするということになるのです。

フランスの哲学者、ミッシェル・フーコーにならっていえば、「人間のあるべき姿」「万人に属する善」に照らして「異なるもの」を断罪する構図になる。

本来ならあっさり「四街道市の車いすマラソン、こしは大勢に参加してもらいたかったので、10kmから5kmに短縮して、広く参加を呼びかけています」というくらいの地方版のニュース記事にすればよかったのではないのでしょうか。そこにこのような障害者スポーツ奨励という観点を持ち込んで書くと、全国

版の記事になる。これはある程度経験を積んだ記者が書いた記事だろう、と思います。こういう書き方をすれば県版ではなく社会面に載るんだ、ということが体験的にわかっている。これは大変気をつけないといけない記事の書き方で、無署名記事の陥りやすい事例の一つです。

僕はこれを「憑依のメカニズム」と呼んでいます。つまり「我々は」という観点、万人に属する善、そこに自分を憑依させて、つまり乗り移って記事を書くという書き方。これは無署名記事の客観報道で陥る一番大きな落とし穴だと思います。そうすると断罪報道になる。

言葉は意図しないものまで発信する

次の記事は、これは皆さん、記憶にあるかと思います。川崎で起きた事件でした。中学生が万引きして、本屋さんのおやじさんにつかまえられて、警察に引き渡された。その少年が警察の手を振り切って、踏切に飛び込み、走ってきた電車にひかれて死亡したという事件です。これは毎日新聞の「万引き……中3逃げ警官追跡、電車にはねられ死亡」という記事です。何でもないフラッシュ記事ですね。どこの新聞も大体似たような記事でした。

この記事が翌日、猛烈な反響を呼んで、この本屋さんのおやじさんのところへ電話が殺到した。「人でなし」「人殺し」とかという、つまり抗議の電話です。万引きしたのは中学生なのです。

ところが、その中学生はどこの中学校の生徒なのか、そして自分の名前も親の名前もいわない。店のおやじさんも困っちゃうわけです。このままじゃ無罪放免で帰すわけにもいれない。しょうがないから、あとは警察に渡して処理してもらおうということになったわけです。本来なら親を呼ぶか学校の先生を呼んで引き渡して、というあたりが穏当な処理の仕方なんだろうけれども、この場合はそういうわけにはいかなかった。それで抗議が殺到して、店を開いているわけにもいれないという結果になってしまった。

ところが、毎日新聞が、店をやめるところまで追い込まれた事情を説明して書くと今度

は、翌日から店をやめる必要はないじゃないか、という逆の反応が殺到する。いったんはやめることを思いとどまったんだけど、結局、最後はやめちゃったというのが事実らしいです。これは客観報道、事実だけを報道しているんだけど、結果的に店を廃業に追い込んだということです。なぜそういうことになるのか。

つまり、先ほどもいいましたように、言葉というのは極めてあいまいなものなので、記者が意図しないメッセージまでも発信してしまう。記者にも計算できない部分というのがどうしても出てくるのです。客観的事実だからいいじゃないか、何で記者に責任があるんだというのは反論にならない。少なくとも、こういう記事の書き方をしたら、こういうことがあり得るのではないかと頭を使っていなければならない。客観報道、フラッシュニュースであっても、その辺まで気を使わないと、やはりとんでもないことになり得る、そういう可能性がありますよ、ということなんです。この記事は、その典型的な事例だろうと思います。

本来なら、実際におやじさんのところに取材に行くべきだっただろうと思います。行って、なぜこういう処理の仕方をしたのか、なぜ警察に渡したのか、そしてやむを得ず警察に渡すしかなかったという、そのあたりの事情をもう少し丁寧に書いてあげれば、恐らく廃業しないで済んだのかもわからない、というあたりが反省点だろうと思います。

だから、客観報道であっても、実に曖昧模糊としている。記者が意図しないメッセージまで発信してしまうんだということを常に頭に入れて記事を書かないといけないという気がいたします。

三人称客観報道の限界

次も記憶にあるかと思いますが、森前総理が小泉さんに、衆議院解散を思いとどまってくれと最後に説得に行ったときの話で、小泉さんはその森さんの説得も聞かないで突っぱねた。森さんと小泉さんが大げんかしたみたいなニュース報道がパーッと出たでしょう。これは毎日新聞の記事ですけれども、各紙同

じような記事でした。

テレビも森前首相がビールの空き缶をにぎりつぶし、例の干からびたチーズを示して、「こんなの食べねえ」とかいいながら記者にしゃべっているところを映し出しました。あのときに、僕はテレビでみていて、これはちょっと危ないぞという感じを受けました。どうみても目が笑っているんです。テレビ映像は、正直に表情まで映すからいいんだけど、新聞の場合は、そういうのが全部消えてなくなって、文字だけになるでしょう。

森さんがこういうことをいったというふうに事実として記事を書いていく。だから小泉さんと森さんがケンカ別れしたというような記事になる。実はこの話には裏がある。「どうやって出ていったらいいんだよ」と森さんがいったら、「怒って出ていってくれ」と小泉さんがいった。「じゃ、握りつぶした空き缶を持っていくぞ」というような話になった（それが事実らしい）。

それで、案の定、あのニュースの翌日から一気に小泉さんに対する評価が変わっちゃったでしょう。小泉さんは本気でやるつもりなんだ、小泉さんはすごい、命がけでやろうとしているというように受けとられた。その小泉人気で圧倒的に自民党は勝利した。このような経過を考えると、このニュースというのは非常に大きかったと思います。

現場にいた記者たちも、これはちょっとおかしいんじゃないか、森さんのパフォーマンスじゃないのかな、という感じを持ったと思うのです。プロの記者なら、そういう感じを持たないというのはおかしいと思います。明らかに変だなという感じがあったと思うのです。政治家の腹芸とよくいいますでしょう。適当に記者たちに受けるような話をして、本当かうそかは二の次というところがあるわけで、記者はそういう感じを持ったと思うんです。ところが、客観報道、つまり三人称の文脈では、その記者の気持ちや判断が表現できないのです。三人称では無理なんです。

どうしても一人称が必要になってくる。森さんはこういったと、ひとまずかぎ括弧でくくる。次にこれが本当かうそか疑問符がつきますよという説明をする。そのためには、一人称の文脈で、記者が顔を出さずしかない。ど

んな場合でも、記者の思い、判断を表現しようとするれば、一人称の文脈が必要になるということなのです。

三人称の文脈だったら、毎日新聞の記事になってしまう。そうすると、森さんのパフォーマンス、腹芸をそのまま事実として報道することになる。

後で森さんは「週刊朝日」で、「あれは小泉さんに『怒って出ていってくれ』といわれたから、僕はああいうふうにしたんだ」とケロッとしゃべってしまう。読者からみれば、新聞のあの報道は何だったのかという話にしかない。そこから見えてくるのは、政治家に踊らされている新聞記者という構図じゃないですか。新聞記事はそれでいいのか、という重大な問題が生じてくるわけです。

一人称の文脈で書けるのであれば、何のことはない。これはちょっと危ないですよ、というメッセージは幾らでも入れられるわけです。しかしながら、三人称客観報道の記事は、こういう記事にしかない。それが大きな問題なのです。

「メディアを読む」という毎日新聞のコラムに、そのことに触れて書いておきましたけれども、これは後で読んでみていただきたいと思います。一人称を排除した三人称の記事だと、しょっちゅうこういう問題は起こってくるわけです。

断罪型から問題提起型へ

次の事例は、毎日新聞のスcoop記事です。これは一面トップで報道されました。

特別養護老人ホームに入っている83歳の植物状態の女性が、意思が確認できないまま人工栄養の投与を打ち切られて死亡した。これは殺人じゃないかというような、非常に危なっかしい記事なのです。微妙な問題。つまり、安楽死なのか、下手すると殺人罪で問われそうな案件でもあるわけですね。

この毎日新聞の記事を受けて、各紙が夕刊で追っかけ記事を載せた。この事件のちょっと前に同じ京都で、同じような事件があったのです。知人が癌か何かで、安楽死させてくれと頼まれて、医者が筋弛緩剤か何かを投与して安楽死させたということで大騒ぎになり

ました。その後だったわけです。これもまた安楽死か殺人かという微妙な問題を問う事件なわけです。この特別養護老人ホームに年寄りを預かってもらっている家族を探し出して取材し、「あしたここから連れて帰る」みたいなコメントを添えて出せば、社会的に大きな影響力を持つ記事になったはずですよ。

僕らの若いころは、「ここに年寄りを入れている家族のだれかからコメントを取れ」、そういう声がデスクから飛んだと思う。そう書いたら、翌日はもう、この特別養護老人ホームにパーッと人が集まって、赤旗やプラカードが立つみたいな感じの事案ですね。そうなるってもおかしくない。昔はそういうふうにして社会を騒がせて、新聞記者の手柄、自分たちの手柄だみたいな、そんなところさえあったわけで、そういう記事の書き方なのです。

ところが、これはそういうふうにならなかった。それはなぜなのかということです。その理由が次の「もうええわ」という記事を読むとわかります。要するに、この記事をスクープした記者が、署名記事で同じ朝刊に一人称で書いている。つまり、これを取材していたら、一面のスcoopができちゃったということか、そういう事例に出くわしたということなのです。だから、本当なら「長命社会を生きる」という、連載記事が先にあったわけですね。

一番冒頭の部分をちょっとみてほしいのですが、「栄養を中断しました」というかぎ括弧の部分がありますね。「医師がそう語った時、私の脳裏を一瞬『殺人』という言葉がかすめた」というふうに書いていますね。それから一番最後のところには、「私はこれまで『安楽死』は人権侵害だと思ってきた。ところが、彼女の周辺は『尊厳ある死』を選んだと信じている。私は迷路に入り込んだように答えをみつけ出せないでいる」というふうにありますね。

これは自分の疑問、自分が迷っている胸の内、どう考えたらいいのかわからないという自分の気持ちを一人称で素直に、正直に語っている署名記事なんです。これがあるからこそ、危ないスcoop記事であっても、赤旗が立たないで済んだ。つまり、この特別養護老人ホームを断罪する記事にはなっていない。

断罪記事ではなくて、問題提起の記事になっているんです。つまり、一人称の署名記事がそうさせている事例ですね。

記者が疑問に思ったこと、つまり人工栄養を中止するということが、本当に殺人にならないかどうか、私はいま、答えをみいだせないで困っているんだけど、皆さんはどう思いますか、と率直に語りかけることによって、問題提起の記事にしている。これは一人称、署名記事でないとできない。一人称の文脈がどうしても必要なんだということですね。

そういう意味で、この記事をすごく関心を持って、大分前のものだけど、スクラップしておいたんです。これは毎日新聞がちょうど署名記事多用化ということを出して間もないころの記事だと思います。

「いま・ここ・わたし」が言葉の原点

ちょうど私が『ニュース報道の言語論』という本を書いているとき、ジャーナリズムの中に一人称を取り戻さなければならないという結論に達し、「署名記事化」ということをい出しておりました。

そうしたら、たまたまその本を書きあげて、後書きを書いているところに、突然北海道の十勝毎日新聞が原則署名記事化を宣言した。署名記事化がそんなに早く来るとは思っていなかったものですから、とにかく本を出すのをちょっと遅らせて、十勝毎日新聞社の1カ月分ぐらいの新聞を全部送ってもらって、その署名記事化した記事を分析して、1章をつけ加えて本を出したのです。

その後、十勝毎日の記者たちとも懇談したりして、署名記事にして、どういうふうの記事が変わったのかの検証をした。ちょうどいまから10年ぐらい前、1995年のことですけれども、そういうようなことがあって、署名記事化というのが一気に新聞業界の流れになってきたということがあります。

しばらくして、毎日新聞も署名記事化の検討をはじめた。たまたまそのころ、社会部の人たちと話す機会がありました。そのときに、果たしてうちの社で、ちゃんと署名記事を書けるような記者がどれほどいるのか、いささ

か自信がないというような話が出ました。そんなことはない、署名記事を書けないような記者はいないはずだ。ほっておいても署名記事は書けるようになりますから、絶対に心配することはありません、僕はそういう返事をしたのです。

そういいながら、内心ちょっと不安でもありました。けれども、署名記事を特別視する気はありませんでした。むしろ言葉というのは自然な形の方がいい。必要なときには一人称で書けばいいわけだし、三人称で記事が書けるときには、三人称で書けばいいわけで、ほっておいてもそういうふうになっていくと考えました。その方が自然なわけで、むしろ三人称だけで記事を書けというときぐしゃくしてくる。自然な形で記事が書けるようにもっていった方がいいというのが僕の考えでした。

毎日新聞もその後すぐ署名記事化ということを出しました。先ほどいった特養老人ホームの事件のケースも、毎日新聞が署名記事化をいい出したころの記事で、断罪報道から問題提起型の報道へと方向がみえてきた。この記事が新しい報道のあり方を示した一つの事例として僕の目にとまりました。

要するに言葉の原点というのは、「いま・ここ・わたし」なのです。私がいま、ここで、こうやって皆さんに向かってしゃべっていることが「いま・ここ・わたし」で、これが言葉の原点なのです。これを排除した三人称の言葉というのは、言葉の命を奪われたも同然、死んだ言葉だということになるわけです。だから、言葉に命を吹き込むという意味で署名記事化、新聞の記事に「いま・ここ・わたし」という言葉の原点を取り戻そう、というのがそもそも私の観点なわけです。

それで、一人称で素直に「わたしは疑問に思っている、これは疑問なんだ、皆さんはどう考えますか」というふうに問いかける記事が書ける。これは一人称だから書けるんです。これを三人称で書け、一人称は使ってはだめといわれたら、記事にはならないのです。だから、そのところをぜひ感じ取っていただきたいという気がします。

実際に原稿を書こうとすると、言語感覚、ニュース感覚というものは体に染みついているもので、なかなか変わりようがないという

部分もあると思います。けれども、その言語感覚は自覚して、やっぱり変えていかないとまずいという気がします。

<一人称 = わたし > を鍛える

皆さんはまだ若いんだから、変えようと思えば、幾らでも変えられる。記事の書き方、言語感覚そのものも変えていけると思います。僕らみたいな年代になってくると、もうだめなのです。だめだっていうのは変だけど、その証拠に、例えばこの署名記事。これはイラク戦争のときに、カメラマンが写真を撮って、文章も書いているのですけれども、この記事を見ていただきたい。

「4月19日の午後、バグダッド市内のアドミヤ地区にあるアル・カラフ病院を訪ねると、急患入り口から血の滴るストレッチャーが運び出されてきた。中に入ってみると、血まみれの3人の子どもたちが治療を受けている最中だった」。これは一人称の文体ですね。この写真を撮った記者が実際にその病院に入ったところの描写なわけです。

「友だち5人で家の近くで遊んでいて、1人がイラク軍の残した武器を放り投げた瞬間、爆発。レイス・ガッサン君(13)の両手両足は辛うじてぶら下がっている状態だった。他の2人もかなりの重症を負っていた。ファインダーをのぞく目から涙があふれた」。こう書いてあるでしょう。

僕はこの記事を見て、イラク戦争の報道の中で一番人間味のある写真と記事だ、という印象を受けたんです。イラク戦争というのは、全く人間の死体の写真もなければ何も無い。ただ空爆の写真とか、そんなのばかりで、人間味が欠落しているのです。けれど、唯一この写真が人間の戦争の現場を撮った写真だった。

これはだれが撮ったかということ、アンマン空港で爆破事件を起こした、毎日新聞のカメラマンなのです。こういう写真を撮りながら、こういう記事を書きながら、自分がそういう事件を起こしてしまった。悔やんでも悔やみきれない話なのです。

この記事、僕はコラムで褒めたんです。いい写真で、いい記事だというふうに褒めた

のです。その記者がまさかああいう事件を起こすとは思っていませんでした。あの記者だということから、僕はびっくりした。

これが毎日新聞でどういう話になったかというと、署名記事みたいなやわなことをいい出し、こういうめめしい記事を推奨するようなことをやり始めたから、こういう事件を起こす記者が出てきたんだ、もとへ戻せ、署名記事化なんていうのはやめろ、という声が社内から出たということです。

その話を聞いたときは、ちょっと待ってくださいという気分になりました。それは考え方が逆なんだ。署名記事化をもっと徹底して、つまり一人称 = わたし というものをもっと鍛えていかないと、こういう失敗を起こす記者も出てくるんだ。一人称 = わたし というものを徹底的に鍛え直さなければだめだというふうに考えないと、方向を間違えますよ、というのが僕のその時の受けとめ方でした。皆さん、その辺、どう考えられるかわかりませんが、少なくとも私はそう考えました。

記者たちが自分の判断で、自分の責任で行動できるためには徹底して自分の力、自分の判断力を鍛えていかないとだめだ。そういう危ない局面に直面したとき、とっさの判断を誤ってしまうということがあってはならない。だから、一人称 = わたし というものを徹底的に鍛えていかなければいけないというのが、少なくとも僕の考え方です。

それが、イラクでの毎日新聞記者の写真と記事に感じたものです。目が涙で曇ってきたというふうに彼は書いているんだけど、同じことをベトナム戦争で活躍した岡村昭彦というカメラマンも書いています。ベトコンといわれる解放軍の捕虜たちを拷問している場面を、「やめろ、やめろ」と叫びながら、シャッターを押して写真を撮っていく。ファインダーをのぞく目から涙があふれて、焦点が合わなくなってくる、というようなことを書いています。泣きながら写真を撮っている。だから、実際に人間がそういう場面に遭遇すれば、涙が出てくるというのはけっしてめめしいことではない。

もう一つ岡村昭彦のことでいっておきたいことがあります。ベトコンのゲリラをつかまえてきた南の政府軍の兵隊が、銃を向けて、

いまにも撃ち殺そうとするわけです。それをみていた岡村はパッと飛び出て行って、カメラを構えて「撃つなら撃ってみろ。おれが写真を撮って世界中に報道してやる。南ベトナムの政府軍はこういうことをやっているんだということを全世界に報道してやるぞ」といって、カメラを構えてじっと銃を向けている兵隊と向き合ってますね。そのときに、その兵隊は、「すまなかった。初めから撃つ気はなかった」といって謝る。「わかってくれればそれでいい」というふうな話になってケリがつくわけですが、米軍の大勢の兵隊がいるところで、岡村昭彦が、「撃つなら撃ってみろ」と怒鳴ったものだから、みんなの注目の的になるんですね。

それ以来、岡村はベトナムの兵隊たち、あるいは米軍の兵隊たちから一目置かれて、その後、「岡村昭彦を死なすな」「昭彦を死なすな」というのが彼らの合言葉になっていく。岡村がベトコンに囲まれて襲撃を受けていると聞けば、米軍の兵隊がヘリコプターを飛ばして救出に向かうという、そういういわくつきの男だった。

つまり岡村の場合は、客観報道ではないんです。人間なんだから、やっぱり涙を流す。ジャーナリストである前に一人の人間なんですよね。

僕はタイトルで「人間のまなざしをもったジャーナリズム」という言い方をしています。つまり、一人称＝わたしを鍛えなければしようがないんだという意味で、そういうタイトルにしたんです。どんな現場でも、徹底的に、自分の頭で考え、自分の心で感ずる。そして、そのことを記事にしていくという方向でないと、本当の報道は多分できないだろうと僕は思っています。

現場を踏んで書いてこそ

もう一つだけ、お話をしたいのですが、それが資料の一番最後の「メディアを読む」についてです。ここで書いたことなんですけれども、「現場を踏んで書いてこそ」という記事なんです。これは、要するに、曾我ひとみさんが日本に帰ってきたときに、ふるさとの山、川、そういう発言がありましたね。それを紹

介する新聞記事、なかでも毎日新聞の「余録」と朝日新聞の「天声人語」、それに読売新聞の「よみうり寸評」というコラム、つまり、朝毎読の日本の3大紙のコラムが全部石川啄木のふるさとの山、川をうたった短歌を引き合いに出して記事を書いている。こういうことをよくも恥ずかし気もなくぬけぬけと書けるな、というのがそれを読んだときの私の感想でした。

つまり、「ふるさととかけて、石川啄木と解く」といったいかにも形にはまったコラムです。こういう文章を書いて平気で一面のコラムを飾っていられるのか、その感覚が私にはわからない。否、わからなくはないんです。私も多分、記者だったらこういう記事を平気で書いていただろうな、という気はします。けど、フリーになってからでは、こういう文章は書けない。こんな文章、とてもじゃないが、恥ずかしくて書けない。皆さんも冗談じゃないよという感じがしませんか。

そういう批判を僕がコラムに書いたら、毎日新聞の「余録」の記者から僕あてに直接抗議の手紙が来たんです。「あなたのいっていることは納得がいかない」というわけです。そもそもこの「余録」というのは無署名記事ですよ。それをわざわざ名前を名乗って、「あの記事は僕が書いた記事です。それに対するあなたの言い分が私には納得できない」という抗議の手紙なんです。いいたいことがあるなら、「余録」で反論するのが筋でしょう。この記者は、何か感違いしているのではないかと思います。

毎日新聞に書くのに、朝日新聞の「天声人語」を批判してもしょうがないわけで、だから、毎日新聞の「余録」をいちばん強く批判した。それが気に入らなかつたらしいんですね。けど、それだけなら、まだいいですよ。

僕が納得できなかったのは、その次なんです。夕刊の「空も土地も私にささやく」という記事、ここには佐渡の曾我ひとみさんの実家、生まれ育った家の周りに実際に足を運んで書いた記事が写真と併せて載っているんです。こっちの記事の方が先の「余録」よりも数段いいんです。

要するに現場に行ってみないと書けない記事というのがありますね。曾我ひとみさん

の家の周り、佐渡だから、周りが全部海じゃないですか。だけど、曾我ひとみさんの「山、川……」には、海が出てこないのです。山、川は出てくるけど、海が出てこない。なぜなのか。多分、曾我さんは海に対する嫌な思いを無意識のうちにも封じ込めようとしたんじゃないか、というのがこの記者の感じ方なんです。記者がそう感じた、その感じがこの記事の命なんです。現場に行った記者でしかわからない感じですね。石川啄木を引っ張ってくる記事と違うんですよ。ここには記者の感じた心があるでしょう。発見があるでしょう。これがこの記事の命なんです。だから、ベテラン記者が机に向かって記事を書くようなことはやめたほうがいい、そんな暇があったらベテラン記者だって佐渡へ行けばいいじゃないの、というのが僕のいいたかったことなんです。

ところが、この記事を「余録」の筆者、すなわち毎日新聞の幹部たるものが高校生の作文程度の記事だという言い方で批評していた。確かにこれはそれほどまい文章だとは僕も思わないけれども、石川啄木を引き合いに出した記事よりは、こっちの方が数段上ですよ、あなたにいわれたくないですよ、というのが僕の正直な気持ちだったんです。

自分の会社の若い記者が書いた記事を「高校生の作文程度の記事」というふうないい方をすると何事か、と僕は返信に書きましたけどね。「あなたのようなことをいっているからダメなんです。そもそもあなたはなぜ自分の書いた記事がダメなのかがまったくわかっていない。発想のパターン化、類型化、物の感じ方、感覚、すべてが類型化してしまっている。つまり、長い間記者をして、無署名の記事を書き続けていると、こうなっちゃうんだということなんです。その怖さがまったくわかってない。そこから抜け出さないと、次の新しい新聞はあり得ませんよ」とというのが僕のいい分だったのです。

もうこういう古い感覚の人たちは新聞社から身を引いたほうがいい。新しい、皆さんのような若々しい感覚を持っている記者たちに、次の新しい新聞をつくっていただきたい。

僕なんか古い感覚だから、もうそろそろ

退陣した方がいいと思っているところです。皆さんの会社でもそうかもしれませんが、ベテランになればなるほど、それだけ長く客観報道でやってきているわけで、それをいまさら変えようといったって、無理なところがあるんですよ。だから、変えるのは皆さんです。若い人たちの新しい感覚で、ぜひ新しい報道、「人間のまなざしをもったニュース報道」、そういう新しいジャーナリズムを目指していただきたい、というのが私が皆さんに声を大にしたいことなのです。

ちょうど時間ですので、これで締めくくりたいと思います。

(質疑応答)

司会(岩崎玄道クラブ専務理事) 玉木さんは毎日新聞の「開かれた新聞委員会」の委員でもあって、いま例に出された記事はほとんどがいろんなクレームがあって委員に配布されたものだそうです。自由に使っていいですよ、といわれているので、きょう材料としてお使いになっているわけです。

矢嶋正幸(信濃毎日新聞) 私は論説を担当しておりまして、社説が主になります。新聞社の社説についても一人称なり、署名記事というのが必要だと思われませんか。

署名記事：自分の心を通した言葉

玉木 私は社説は署名記事にした方がいいといつもいっているわけです。そもそも社説というのはだれの説なのかということがまずわからない。そういうところがありますね。

毎日新聞でも、署名入りの社説のコーナーがありますでしょう。毎日新聞はわりと自由なところで、社説を平気でほかの記者が批評する記事を書いたりする。つまり、記者同士が論争するというのを平気でやる新聞なんですよ。

そういう状況を考えると、そもそも社の説というのは成り立つのかどうか、疑問に思うところもあります。大体漠然とした社の説というのはあるのですが、社内言論の自由ということが基本だろうと思っております。

ただ、社全体としてどういう方針で行こうかというような一定の方向性はあってもいいのではないか。例えばイラク戦争、自衛隊派遣とか、憲法改正とか、そういう大きな問題について、論説委員たちが集まって社の方針というのを決めているみたいですけども、そういう社説はあっても構わないという気はします。けれども、論説、論を立てる、意見をいうという場合は、署名が原則、自分の責任で発言するというのが基本だ、というのが僕の考え方です。

沼尾歩（下野新聞） 我が社でも署名化についていま検討しています。私はサツ回りなんですけれども、サツ原稿については、署名化することによって、情報源がサツにばれてしまうというような危険性があるんじゃないかという指摘もあります。そうした警察原稿についてはどうお考えでしょうか。

玉木 警察記事もそうだし、経済記事でもそうなんですけど、だれがこの記事を書いたかがわかれば、取材源がわかるということがあります。あるいは、名前を出すことによって、記者自身に危害が及ぶ危険があるような場合も出てくる。そういう場合は、別に署名を入れることについて形式ばらないでいいと思います。署名記事というのは、言葉が一人称＝わたし の思考経路を経て発語されているかどうか、すなわち自分の心を通した言葉であるかどうか問題なんです。しかがって、名前が書いてあるかどうかということは、二の次といったらおかしいけれども、本質的な問題ではない。もちろん署名があった方がいいに決まっているが、その前に一人称＝わたし 心を通して言葉を発信するという考え方が重要だと思います。

僕らが駆け出しのころ、「記事は頭で書くな、足で書け」ってよくいわれたものです。でも、やはり足で記事なんて書けない。頭で書くのですよ。自分の心で書くのです。心を通した言葉こそが大切なんです。それとは逆なのが、昔の客観報道の考え方です。心を通すな、お前の心なんて関係ないんだ、現場に行っただで書いてこい、というのが昔の考え方です。そうじゃなくて、自分の心を通して

言葉を発語するというのが署名記事の考え方です。実際に署名を入れることによって、いろいろ危惧される点があるような場合は、名前を入れなくたってかまわない。ただ、言葉がちゃんと一人称＝わたし の思考経路を経ているかどうかだけが本質的だということです。

司会 先ほどの昼食会で、みなさんも新しい検事総長の但木さんの話を聞いたわけですけど、お上依存の日本の伝統的な文化、社会、それが個人の責任、自立型へ移行しつつある過程にあって、しかもその過程はそんなに単純にスパッと切りかわっていませんよね。ですから日本の新聞もテレビも、日本のジャーナリズムの最大の特徴は組織ジャーナリズムで、いままでは玉木さんのようにフリーで活躍される方は、非常に希少な数ですよ。

本来、ジャーナリズムというのは個人ベースで発想すべきところが、日本では、さっきいったような国柄、社会的な伝統の関係で、組織単位でいくわけです。しかも、従来、いま、玉木さんが指摘されている客観ジャーナリズム、アメリカから本来押しつけられたわけですが、これも、ある意味では戦前の反省からそれを受け入れた部分もあるし、安易性ですね、顔を出さないで済むわけですから、楽な形で、安易に流れた部分もあるわけです。より積極的には、公共圏の観点からいえば、まだまだ客観報道の大事な部分はこれからも存続しなければならないと僕は思います。

ただし、その基礎にあるのは、やはり組織に属していても、玉木さんがご指摘のように一人の個人の記者としての自立ですね。自立した自己責任の人々を期待する社会を想定するのなら、まず記者が率先してその役割を自覚しなければやっていけないだろうと思うのですけれども、皆さん方はどういうふうに考えてらっしゃるのか。

心が通っていない報道には違和感

玉木 僕も、客観報道の理念、三人称の記事をすべて否定するわけじゃないんですよ。三人称で記事を書かなければならない局面というのはいっぱいあるわけです。ただ、一人

称の記事が必要なときに、一人称で書けないというのではまずい。私の思考経路を経て言葉を考え、一人称の文脈で言葉を紡ぎ出していかなければならない場合もある。三人称が必要な場合は三人称で書けばいいし、一人称が必要ななら一人称で書けばいい。

だから署名記事化が必要だといっても、三人称の記事、客観報道といわれている記事をすべて否定しているというふうには思わないでいただきたい。誰が書いてもそういう記事になる場合というのはあるわけで、特に、ストレートニュース、一報の形式の場合は、ほとんど三人称の記事になる。そこで一人称を出すスタイルというのはまずないだろうと思います。そのあたりは局面に応じて判断しなければならない。ただ、どのような場合でも、常に一人称で言葉を考えていってほしいというのが、基本的な考えなんですよね。

先ほどいった署名記事はめめしいという問題がありましたけれど、それについて一言だけつけ加えておきます。ベトナム戦争にかかわった、本多勝一という朝日新聞の記者がおります。彼の書いた記事の中でこれはおかしいなと、思ったことがありました。

米兵がベトコンの死体の耳をナイフで削ぎ取って、戦利品として自国に持ち帰るとするのがやっていた時期があったらしいんですよね。それを本多勝一は、「彼は - 米兵のこと - ナイフを使ってスイスイと耳を切り落とした」と書いているのです。これ、おかしい。死体の耳といっても人間の耳ですよ。「彼はナイフを使ってスイスイと耳を切り落とした」と書いているんですよ。

記者が心を動かさない客観報道、三人称の記事の方が男らしいのか、これがジャーナリストなのかというと、そうではない。岡村昭彦やアンマン空港で爆発事件を起こした毎日新聞の記者のように、ファインダーをのぞく目から涙がこぼれて焦点が合わせられなかったという方が人間らしいんじゃないかという気がします。人間の耳をスイスイとナイフを使って切り落としたと平気で書ける記者の方がよほどおかしい。

みなさんどう思いますか？ これは三人称の記事だから、つまり客観報道だから、こういう表現になる。このような記者の心が通

っていない報道というのは、やっぱり違和感がある。私はどうしても本多勝一のこの文章にはついていけなかった記憶があります。そのあたりの言語感覚が問題だと思います。

前島文彦（山梨日日新聞） 署名問題についてうかがいます。玉木さんの中で、この問題は非常に重要で考えるべきだというふうにしたのはいつ頃ですか。もし「新潟日報」時代のお話とフリーランスとして独立された経緯に何か関係があるようであれば、そのあたりを教えていただきたいのですが。

一人称を取り戻すのに3年かかった

玉木 私も「新潟日報」にいたころは全く署名記事なんて考えておりませんでした。そのころは署名記事というのは、ベテランの偉い記者が書くものだとばかり思っていました。支局にいたころに万年筆で原稿を書いたら、「ばかやろーっ！」と怒鳴られました。「万年筆で原稿書くのはまだ十年早い！」というような時代でしたから、署名記事なんてとんでもない話でした。

ところが、フリーになった途端に、今度は自分の文章を書かなければならないわけです。それがまったく書けないんですよ。おかしい話ですよ。三人称の文章なら書けるんですけど、自分の文章、なんでもない一人称の文章が書けない。

新聞記者をやめてフリーになって文章を書こうとすると、“わたし”が問題になるわけですね。玉木明の書く文章でなければお金がもらえないわけじゃないですか。すでに「新潟日報」の記者ではない。さりとて、元記者では原稿料をもらえないんですよ。玉木明の書く文章が求められる。3年ぐらい自分の文章が書けなかった。全く書けなかった。いま思うと、一人称＝わたし を取り戻すことに3年間くらいかかったっていう気がするんですよ。

署名記事が大切なんだというふうに思い出したのは、もっと後になってからのことです。ジャーナリズムについて真剣に考えてみようかというふうになって、『言語としてのニュー・ジャーナリズム』という本を書きまし

た。これはいまから 15 年ぐらい前ですかね。そのときに初めて署名記事ということを実際に考えてみたように思います。もちろん、一人称の文章で書けなきゃしょうがないという感じはありましたけれども、ジャーナリズムに一人称を導入しようというふうに考えたのはそのころですかね。

そのことについて、玉木はジャーナリズムに文学を持ち込んだ、ひでえ野郎だという、えらいおしかりをこうむったところもありましたけれども、まあそういうふうな考えに至った経緯をふり返ると、自分の体験とどこか重なってくるようなところが確かにあります。

司会 きょうの材料は全部新聞記事だったので、放送の方はちょっと違和感があったかもしれません。

ただし、基本的には多様化した社会の中でメディア側が受け手との共感とか共鳴、共生というようなことを考える場合には、同じ共通項の中で問題意識としてとらえられるのでは、というのがきょうのお話だったのではないかと考えています。

それから、玉木さんご存じかどうか、お話にあった毎日新聞の記者は介護士の国家試験の免許をとって、新しい道へ歩み始めているようですよ。

玉木 そうですか、それはよかった。

司会 今日はどうもお忙しいところ、ありがとうございました。(拍手)

文責・編集部

玉木明(たまき・あきら)氏略歴 1940年生まれ。新潟日報を振り出しに、出版社勤務を経て、70年からフリーランスとして活動。97年から毎日新聞の「メディアを読む」執筆者。現在、毎日の「開かれた新聞委員会」委員。著書に『言語としてのニュー・ジャーナリズム』(学芸書林)、『ニュース報道の言語論』(洋泉社)など。